

1 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は21ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、携帯電話・PHSの電源は切ること。
- 三、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 四、監督から試験開始の合図があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっているかどうか確かめること。
- 五、解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 七、マークをするとき、枠からはみ出したり、枠のなかに白い部分を残したり、文字や番号、枠などに○や×をつけたりしてはならない。
- 八、訂正する場合は、消しゴムでいいねいに消すこと。消しすぎはきれいに取り除くこと。
- 九、解答用紙を折り曲げたり、破つたりしてはならない。採点が不可能になる。
- 十、試験時間中に退場してはならない。
- 十一、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十二、問題冊子は必ず持ち帰ること。

—
次の文章を読んで、後の間に答えよ。

「なぜ詩を作るのか」という問いに対して、ある詩人は「日常のことばの記号性を打破するために」と答えている。日常のことばでは、語形と語義の間に、慣習によって定められた結びつきが出来上がってしまった。日常のことばを使っている限り、われわれはすでに多く惰性化した日常のことばの決まりの上に成り立つ日常の世界の中で、これまた惰性化した営みを繰り返すだけである。詩人の意図しているのは、この惰性に揺さぶりをかけるということである。既成の語形と語義の間の結びつきをずらしてみる。(例えば、「焰ほのおのつらら」のような比喻はその一つの場合である。)そして、その新鮮なことば遣いの創り出す意味を、日常の世界を超えるための踏み台とするわけである。

新しいことば遣いも、ある表現があることを意味している(あるいは、意味しているように解せる)という限りは、やはり「記号」であることには変わらない。²しかし、それは、すでに定まった内容を慣習に従って何かが表わしているというように「符号」ではない。むしろ、新しい「記号」が生み出され、その「記号」によって捉えられた新しい内容がわれわれの世界に新たな知見として加えられる。それは一つの創造的な営み——神学的な意味とは別の意味での「言語創造」³の営みである。

「言語創造」と言うとは何か大変崇高なことに聞こえるが、実はこのような「言語創造」は、人間であれば誰もが絶えず行なっていることである。朝の小鳥のさえずりに楽しい一日の予告を読みとったり、一枚の葉の落ちていく様子に天下の秋を知ったりする時、そこでは「記号」が作り出されている。人間は、すでに慣習的に定められた「記号」をあやつるばかりでなく、新しい「記号」をせっせと創り出しているのである。

現代の記号論がとりわけ関心を寄せる「記号」とは、実はむしろこのような「記号」なのである。こういう「記号」には、慣習としてすでに出来上がっている「符号」のような固定性はない。それらはいわばもつと⁴しなやかなものであって、「記号」ということばの適用にためらいすら感じさせる。

現代の記号論での議論では、「記号」ということばの代わりに「記号現象」(あるいは、「記号過程」といった用語がよく使われ

るが、これもそのような点を顧慮してのことなのである。このように考える場合、いちばん基本になることは人間の「意味づけ」でもいった行為——つまり、あるものにある意味を付したり、あるものからある意味を読みとったりする行為——である。人間が「意味あり」と認めるもの、それはすべて「記号」になるわけであり、そこには「記号現象」が生じている。この「言語創造」にも似た行為を、人間は絶えず、しかもその文化のあらゆる面で行なっている。その原型と本質を探ってみること——そこに現代の記号論は関心を向けるのである。人間の「意味づけ」する営みの仕組みと意義——その営みが人間の文化をいかに生み出し、維持し、そして組み変えていくか——現代の記号論はこういうことに関心を持っていると言いかえてもよいであろう。

ところで、人間の「意味づけ」の営み——それは日常生活のレベルでは、何よりもまず「ことば」の使用によって支えられている。もしそのようには考え難いというのであるならば、それはすでに慣習として固定化したレベルでことばを捉えているからである。遡^{まかのぼ}って、ことばが生まれる時点を考えてみるとよい。いちばん身近で単純な例は、日常生活における「命名」という行為である。

例えば自分が飼っている犬に「ポチ」という名前をつけるとする。なぜ名前をつけるか——もちろん他の犬と区別するためである。では、どうして区別するのか——それはその犬が自分にとって他の犬とは違った特別の価値を持っているという認識があるからである。(人間に対する命名を考えてみれば、この点はもつと明らかであろう。人間には誰しも名前が与えられるが、犬はそうではない——これはもちろん大変理由のあることなのである。特別の名前が与えられることによって、そのものが他でもって代えることのできないものであるという意味づけが完了し、自分との関連が確認されるわけである。

名前が与えられ、確認される対象は、例えば自分の親しい人とか、大切に飼っている犬とか、その正体も素性もよく分かっているものに限られる必要はない。例えば、あるグループの人たちが自分たちの行動・運命が何か自分たち以外のものによって支配されていると思ひ、そのようなものに「ブーボー」と名前をつけたとしよう。(このような場合、名前をつけることはばかつて単に「印」——例えば⊕——でもって代えることもあろうし、あるいは名前はあるのだがそれを言うのはタブーになっ

ているということもある。しかし、いずれにせよ、それを表わす「記号」が出来たわけである。そして人びとは自分たちが「ブーボー」という名前をつけた対象に働きかけて(例えば、祈りや供え物を捧げることによって)、自分たちの行動や運命に対する支配が好ましいものになるよう試みるであろう。しかし、「ブーボー」そのものの正体はその間、結局はよく分からないままかも知れない。

ただ、名前を与えることによって人びとは一つの存在を想定し、自分との関連でそれを位置づけてみようとしていることだけは確かである。「ブーボー」という記号は、未知のものを捉え、自分との関連で意味づけし、自分たちの世界に取り込もうとする人間の試みの産物である。少し考えてみれば、未知のものを意味づけるといふ記号の働きは、このような「宗教的シンボル」とか、捉え難い芸術的理想を象徴するといったような場合から、未知の素粒子や惑星を想定して理論的に論じてみるというような自然科学の先端的な分野に至るまで、人間の文化的な営みに広く関わっていることが分かるはずである。

ことば(あるいは、一般に記号)による意味づけという営みを通じて、人間は自らにとつて未知のもの、関わりのなかったものを自らとの関連で捉え、自らの文化の世界の中に組み込み、自らの世界をふくらませ続ける。

(池上嘉彦「記号論への招待」)

問一 傍線部1「日常のことばの記号性を打破する」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 日常世界の平易なことばを否定し、詩人らしい難解な揺らぎのことばを創造すること。
- b 日常のことばがもつ、語形と意味との強い惰性的結合を完全に分離させること。
- c 日常世界を成り立たせている日常のことばの惰性に新たな記号的慣習をもたせること。
- d 日常のことばのもつ、語形と意味との定着した結合に大きな動揺を与えること。

問二 傍線部2(「記号」であることには変わりない)とあるが、なぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 新しいことば遣いも、語形や表現が意味と結合しているという点では惰性化したことばと同じであるから。
- b 新しいことば遣いも、創造的な仕方の意味するという働きをもつ点で、古いことば遣いと変わりがないから。
- c 新しいことば遣いも、日常のことばの中から生まれて来たのだから、いずれ同様に慣習化してしまうから。
- d 新しいことば遣いも、決して新たに創造された言語ではなく、日常のことばと同じ記号性をもつから。

問三 傍線部3(「言語創造」の営み)とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a ある日常世界の状況の中で、慣習的な記号を生み出すことで、独創的な知識や見解をつくりだすこと。
- b ある日常世界の状況の中で、慣習的ではない記号を生み出すことで、新しいものの見方をつくりだすこと。
- c 記号の内容がありふれた日常的世界を変えながらも、実はあまりにありふれた日常的な営みであること。
- d 記号の内容が自然の風景に対する見方を変えさせることで、記号を創り出す意義を知るに至ること。

問四 傍線部4(へしなやかなものであって、「記号」ということばの適用にためらいすら感じさせる)とあるが、その理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 「記号」が新しい知見を生むとしても、「記号」が、慣習的な「符号」と同様に固定的な既成の意味をもつことも多いから。
- b 「記号」が新しい知見を生むとしても、「記号」ということは自体は、どうしても固定的なものを印象づけてしまうから。
- c 新しい知見を日常的に生み出すことで、「記号」は常に柔軟で応用の利くものとなるが、そのことは実は「記号」本来の姿を表してはいないから。
- d 新しい知見を日常的に生み出すことで「記号」が慣習を越えた結果、「符号」の固定性をも否定せざるを得ないこととなるから。

問五 傍線部5について、「記号現象」が生じているとは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 人間は絶えず新しい意味を創り出す仕組みをもち、そのことで記号もまた新たにされ、現代の記号論が成立する。
- b 人間は「意味づけ」を行うことで文化を創り出し、更に「意味づけ」の意義にも関心を向けるに至る。
- c 人間は絶えず意味あるものを追い求めており、それが記号として表現されることで様々な文化を生み出している。
- d 人間は「意味づけ」によって文化の維持と組み換えを行うことで「記号」の働きの限界を越え出る。

問六 傍線部6（「命名」という行為）とあるが、この説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「命名」という行為は、対象を意味づけることによって、日常生活の中で新しいものの見方を生じさせる働きである。
- b 「命名」という行為は、価値ある名前をつけることで新しいことばが生まれる時点を考える身近な働きである。
- c 「命名」という行為は特別な価値をもつことの表現であり、そのことが「意味づけ」の意義自体を新たにしている。
- d 「命名」という行為が命名する者の文化を変えさせた結果、未知のものについても命名できる可能性を広げている。

問七 本文中の「命名」の事例である「ポチ」と「ブーボー」についての説明として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 「ポチ」と違って「ブーボー」は人間を支配する不明の存在であるから、その支配のあり方に対しては新たな意味づけが必要とされてくる。

b 「ポチ」と「ブーボー」はいずれも命名する行為の所産や結果であり、この行為によって言語創造の意義を他のどのような創造よりも特別なものになっている。

c 「ポチ」と違って「ブーボー」は存在すると考えられた未知のもの名前であるが、いずれも命名により文化の世界に組み込むための記号である。

d 「ポチ」と「ブーボー」は文化的には別々の命名行為の所産や結果であり、その名前の違いこそが意味づけ自体の意義を明確なものにしている。

問八 傍線部7「未知のものを意味づけるといふ記号の働き」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 未知のものは最終的には不明のままでも、命名行為自体には既知の場合に比べて遥かに意義の大きい意味づけを有している。

b 存在しないかもしれないし不明のままかもしれない未知の存在を常に想定し、命名すること自体が文化現象やその成立の基礎となる。

c 宗教・芸術・科学における記号現象には、常に未知を既知に変える言語創造があり、この現象こそが全世界の必然的な拡大をもたらしている。

d 未だ判然としていないものに記号を与えることで意味づけへと進み、その結果、宗教・芸術・科学といった文化現象一般を成立させることになる。

問九 筆者は文化と記号についてどのように考えているか。その考えとして、次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

- a ことばを代表とする記号一般が文化を生み出しているという点で、まさに文化現象とは記号現象そのものである。
- b ことばという記号は文化現象を根底から支え基礎づけているのであって、文化理解にことばの使用は欠かせない。
- c ことばの命名行為のみがもつとも重要な記号現象であり、そこに文化の発生の根本的な場面を見ることができう。
- d 記号現象は文化を生み出してゆくが、両者は切り離せない以上必然的に現代の記号論は現代の文化論になつてしま

問十 本文の内容と一致しているものはどれか。次の中から二つ選べ。

- a 言語創造とは崇高なものでも神学的なものでもなく、誰でも行う日常的なことであるが、しかしその中でも詩人や宗教者や科学者の言語創造は特権的な創造である。
- b 現代の記号論は、従来のような「符号」としての固定的な記号の考え方を否定して、ひたすら言語の使用のみが文化を創造してゆくという言語創造の働きに強い関心をもつ。
- c 「宗教的シンボル」とは未知のものに対する記号の働きをなし、祈りや供え物の儀式などの文化的形式を創り出す記号現象であり、様々な記号現象の中でもつとも創造的なものである。
- d 「焰のつらら」という記号は、詩人が日常世界の情性を超えるための踏み台として創造した記号であり、このような記号こそ、芸術的理想を象徴するもつとも典型的な記号なのである。
- e ことばをはじめ様々な記号の働きとは、例えば「宗教的シンボル」や芸術的理想のように、その存在を想定した生活の中で新たな意味づけをしてゆく文化の創造的な活動である。
- f 「朝の小鳥のさえずり」という表現と「楽しい一日の予告」という理解は本来何の関係もないが、両者が結びつくことで日常生活に新しい考えを付け足すことになる。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

都六条わたりに、馬場の何某といふ人、兄の病ひして、はかなかりしことにつきて、つかふる君の御いとまたまはり、母一人、兄の子のをさなきをつれて、市に隠れたりしに、親をかしづき、みなし子をいとほしむまめ心を、あたりの人の見聞きで、おほやけのみことのままに、うたへ出ん事を告げしらしに、「あなかなし。この親につかふるをほまれとせんこと、いとも恥あることなり。我はあからさまにこそ物すれ、召されて物問はせ給はんに、何とかはこたへ奉るべき。うたへ出でられぬさきに」とて、母をおひ、をさなきが手を引きて、夜にかくれ、いづちへも逃げ去らんとす。家主隣の人々あわてまどひ、かくたふとき志をうばふべからずとて、うたへの事とどまりぬ。今は昔の御宮づかへに召しかへされ、家をおこし給へりや。

また、我が難波の故さと人の、母一人を、兄おとと妹はらから三人がかしづきて、兄は老いゆくままに、「めとれ」といへど、「いかなるもの出来て、親につらきことやあらん」とてむかへず。弟と妹は、人の養はんといへど、母のかたはらをさらじとてゆかず。母「物に詣でん」といへば、おととい二人して輿にかきのせ、になひもてゆく。妹はつとそひてなくさむる。はた、おほやけに聞こし召されて、物かづけ、重く賞せさせ給ひしなり。ある人の母、これを聞きて、「あなたふとし。かかる宝の子を産みならべし人は、神ほとけの化身にや。ただいぶかしきは、めとらず養なはせず、後いかなりともはかり思はで、その輿に乗りて出で遊ぶらん親の心こそしらね」と、我にかたられし。これも世のことわりに承り侍りき。

また、鎌倉の何がし寺に住ませ給ふ大とは、伊予の国大洲の浦辺にいさりする人の子とか。知識の名、天の下に聞え給ひしかば、国の守の菩提院に召されて、道の教へを聞かせ給ひし。この便りにつきて、まづ、母の老いておはすを拝み奉らんとて、詣で給ひしに、母のいはく、「おもひきや。蟹の子のかくたふときになり昇りて、かうの殿の御召しをさへかうむらんとは。されど、それ、ただ才能のかたの学びをえて、まこと仏の教へにはうとときにやあらん。さきさきの便りごとに、文に巻きそへて、黄がね白かねをおくりたまはること、いかなる心ぞや。今の子の立ち走りて、網曳釣だにせば、たふとき財宝をも何

にかはせん。この贈らるるは、世の人の仏に奉りし物ならずや。さらば道の為にこそちらすべきを、浅ましき世わたりする身の、これを納めて、いかばかりの罪をかむくはれん。親の為思はぬなり。いと恐ろしさにかへすぞ」とて、つつめるまま、あまた投げあたへぬ。大とこおそれみかしこみ泣きわびぬとや。

『藤篋冊子』

〈注〉 大とこ―大徳の僧。高僧。

問一 傍線部1「はかなかり」と同じ意味で用いられたものを、次の中から一つ選べ。

- a 「むかし、はかなくてたえにける仲、なほや忘れざりけん」(伊勢物語)
- b 「御屏風どもなどいとをかしき絵を見つつなぐさめておはするもはかなしや」(源氏物語)
- c 「男子一人ははかなうなり給ひにけり」(榮花物語)
- d 「まことや、その年十一月十一日阿波の院かくれさせ給ぬ。いとあはれにはかななき御事かな」(増鏡)
- e 「人々の花蝶やとめづるこそ、はかなくあやしけれ」(堤中納言物語)

問二 傍線部2「まめ心」の意味として、もつとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

- a 誠実な気持ち
- b よく気がつく様子
- c 健康な心
- d 実用的なさま

問七 本文の最初に「柳宗悦の民藝運動には、今でもまだ考えるべき実に多くのことが残されている」とあるが、筆者がそのよ

うに述べる理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 民藝運動が現代の資本主義社会の墮落を象徴しているから。
- b 無名の人々が手作業で作った生活用品にこそ芸術的な価値があるから。
- c 真の工藝品と墮落した工業製品の区別をすることがきわめて難しいから。
- d 民藝という言葉の中心に把握しがたい力があり、新しい物の見方を与えてくれるから。

問三 傍線部3のように「うたへ出ん事を告げしらせ」たのはなぜか。その理由として、もっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

- a 困っている様子を見ていられなかったから。
- b 世の中の手本となるべき人だから。
- c みなし子は施設に入れて育てるべきだから。
- d 困っている人を報告するようという通達が来ていたから。

問四 傍線部4のように「いとも恥あることなり」と返事したのはなぜか。その理由として、もっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

- a 当然のことをしていると思っていたから。
- b 人前に出るのが恥ずかしいから。
- c 他人の助力を受けるのは避けたかったから。
- d 貧乏を恥じていたから。

問五 傍線部5「何とかはこたへ奉るべき」の現代語訳として、もっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

- a どのようにお答え申しあげなければならぬのですか。
- b どのようにお答え申しあげればいいのかわからない。
- c どのようにお答え申しあげるのが一番いいのでしょうか。
- d どのようにお答え申しあげることができるのでしょうか。

問六 傍線部6「物かげ」の意味として、もっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

- a 褒美を与え
- b 着るものを着せ
- c 物を背負わせ
- d 他の者のせいにして

問七 傍線部7「たふとし」とはどういう点についていうのか、もっとも適切な説明を、次の中から一つ選べ。

- a 子供たちが、たくさんの宝を持っているから。
- b 立派な子供を三人も産んだから。
- c 子どもたちが幕府からほめられたから。
- d 母親が神や仏のように立派な人だから。

問八 傍線部8「世のことわり」の、この場合についての説明として、もっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

- a 世間から誉められるような子供を持つのが親としての願いだということわり
- b 子供が、親に尽くすのは当然だということわり
- c 親としては、家の存続を考えるのが最も大切だということわり
- d 老後は、子供たちの世話になって過すのがよいということわり

問九 波線部イ、ロの人物を組み合わせたa、fの中から、同じ人物でない組み合わせを二つ選べ。

- a イ「馬場の何某」とロ「難波の故さと人」
- b ハ「兄おとと」とニ「おととい」
- c ホ「大とこ」とヌ「今の子」
- d ヘ「いさりする人」とチ「蟹」
- e ト「国の守」とリ「かうの殿」
- f ル「世の人」とヲ「浅ましき世わたりする身」

問十 傍線部9「おもひきや」の現代語訳として、もつとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

- a 思っていましたか
- b 予想していました
- c 予想もしなかった
- d 思っていたのに

問十一 傍線部10「まこと仏の教へにはうとときにやあらん」と言うのはなぜか。その理由として、もっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

- a まだ充分に修行を積んでいないから。
- b 修行中に母親に会いに来てはいけないから。
- c 僧へのお金は、人々が仏のために出したものだから。
- d その程度のお金は、いつでも自分でかせぐことができるから。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

柳宗悦の民藝運動^{みんげい}には、今でもまだ考えるべき実に多くのことが残されている。普段使いの安手の焼き物、籠^{かご}や刷毛^{はけ}、安価な土産物に過ぎなかった大津絵の類、その他無数に生産された生活用品が、限りなく優れたものでありうる。これは、趣味や道楽や、単なる目利きというような問題を、もちろんはるかに超えている。(物が在る)ことについての、ひとつの新たな発見の仕方が、柳の民藝思想のなかにはあった。¹ 彼が発明した「民藝」という言葉が、いまでは全国各地の土産物店で使われている事情は笑われていいが、それをただ笑っていていいかどうかは、別の話である。

この言葉が意味したところは、やはりそれくらい広い浸透力を持っていた。そこに注意を向けるほうがいい。そんなふう²に拡がった言葉は、すぐにおそろしく陳腐化する。しかし、その拡がりの中心に逆行していけば、容易^{とよ}に捉え難い力に出会う。「民藝」は、柳自身にとつてもそういう言葉であつただろう。

民藝とは、民衆の工藝であるが、この工藝は資本主義社会の発展とともに墮落し、眼をおおう惨状を呈するに到つた。柳はそう言う。どの家にもある椀ひとつを取つても、はるかな転落の距離が無残に観て取れる。しかし、そうは言つても、ほんとうの工藝であるものと墮落した工業製品との違いを、そんなにはつきりと見分けられる者は多くない。工藝品は、下手^{げて}の日用品だった。同じく、今日の生活に行き渡るプラスチック製品も下手の日用品である。誰も気にとめることなく使い捨てることにおいては、² 変わりない。ふたつの物の間にある根底の差異を、どのようにして語ることができるのか。それらを見分ける目利きが現にいることは、もちろんわかる。が、見分けるその理由を、どうやって語ることができるのか。

柳は、実際それをいろいろに語ろうと努力している。同類の目利きを少しばかり増やすだけでは、骨董屋や美術商がぬかりなく儲けるばかりである。あるいは、柳がその創設に奔走した日本民藝館の入場者が少しは増える。それでは、資本主義下の欲望の態勢は変わらない。³ 「正しき工藝」と「誤れる工藝」との根底の差異を語る言葉は、まさにそうした欲望の態勢を変えうる言葉でなくては意味がない。目利きの講釈は、その種の言葉ではない。審美的な批評の言葉や、学術的な研究の言葉も、そう

ではないだろう。生来の美文癖を持つ柳宗悦は、そのことにたいそう苛立いらだっていたと、私は見ている。

昭和二年に書かれた「来るべき工藝」という文章のなかで、柳は言っている。

資本制度の罪過に関する経済学的難詰に対して、専門家でない私は常識以上に何事をも論ずる資格がない。だが純に工藝美より社会相を見る時、私には資本制度の許すべからざる罪過に就いて、もはや疑を挿む余地は残らぬ。その制度の勃興と共に工藝の美は急速に沈んだ。私は美に対する私の直観と理性とが、社会主義的結論と一致するのを発見する。その制度の続く限り、民衆から起る工藝の、あの偉大な美はあり得ず、又あり得る望みはない。今人間のみが貧に悩んでゐるのではない。工藝も今や瀕死の状態にある。否、無数のものが横死をとげてゐると云つてよいであらう。

では、どうすればいいのか。資本制度を潜り抜けて蘇る「来るべき工藝」は、どこからやって来るのか。柳は、「それを可能ならしめる根拠」を三つ挙げてゐる。一つは、「工藝に対し不可思議にも仕組まれた恩寵の摂理」が働くこと。二つは、「目覚めたる個人の指導」が民衆のなかであらためて為されること。三つは、「協団の力」が動くこと、すなわち制度が工藝を守ることである。第二と第三の「根拠」が得られるかどうかは、社会運動の成否にかかつてゐる。第一の根拠は、それこそ「恩寵」のあるなしにかかつてゐるだろう。だが、これなしに民藝運動なるものが起こるきつかけはない。

⁴ 「資本制度」に対する柳の憤りを、白樺派文人が装っているプロレタリア文学運動への甘い追従ついでのように見なすとしたら、それは実に詰まらないことである。「工藝美」というような彼の言い方にこだわることもないだろう。彼がそう言う時には、誰も「美」とは呼ばなかつたひとつの事実、日常生活のなかへの絶え間ない「物」の降臨を指している。そうした「物」とは、たとえば本居宣長が、人間のあらゆる道はただ「物にゆく道」だと言つた、その「物」のことである。

「醜」に対する「美」ではない。そんな対立は、言うまでもなく時代の固定観念に属する。生へ向かつての「物」の十全な、あるいは絶対の顕われ、その事実を柳は仕方なく「美」と呼ぶことにしている。そうした顕われは実は不断にあるのだが、めつたに気付かれることはない。ただ人は、工藝と呼びうる「物」を通して、そうした顕われに知らず知らずのうちに養われている、ということがある。⁵ 「恩寵の摂理」に導かれた生活が、そこにある。「正しき工藝」は、「物にゆく道」を沈黙のうちに開く、と言つ

てもいい。そうして生まれる工藝品が、なぜ生活のなかで手に馴染み、何よりも使いやすいものになるのかという問題は、実は大変深いところにまで伸びているだろう。

ところで、「誤れる工藝」の誤り方には、二種類ある。ひとつは、機械化された工場が商品を大量に出荷することによる誤り、もうひとつは、作家と称する個人が勝手な自意識から作品を捻り出すことによる誤りである。二つは、もちろん密接な関係にある。工場から締め出されて孤立した個人が、自意識を発生させ、近代的な作家になる。近代の工場製品といわゆる個人的作家の作品は、柳の言う「工藝」の観点から見れば、同じ社会の同根の病を持つ。二つは、「物」の質に入り込む忍耐や謙虚さを、それぞれの仕方ですべて失っているのである。そうやって、「不思議にも仕組まれた恩寵の摂理」から、取り返しがつかず見放されている。その不幸と悲惨とを知らなくてはならない。

(前田英樹『日本人の信仰心』)

〈注〉 下手…並の品

問一 傍線部1のように筆者が述べる理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 芸術運動の名称にもなった語がお土産店で使われる状況は滑稽でさえあるが、実はその語の真の面白みを理解している者はほとんどいないから。

b 芸術運動の名称にもなった語がお土産店で使われる状況は滑稽でさえあるが、その語の持つ重要性は今もなお変わらないから。

c 柳宗悦が作った言葉の陳腐化を嘲笑する者がいるのは理解できるが、その者たちはこの言葉の浸透力の凄^{すご}さを実感できていないから。

d 柳宗悦が作った言葉の陳腐化を嘲笑する者がいるのは理解できるが、ただ笑っているだけでは芸術運動の成功はおほつかないから。

問二 傍線部2における「差異」を筆者はどこに認めているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a それらが生産される資本主義社会が発展しているか、墮落しているか、というところ。

b それらが美術商や骨董屋の承認を得るか、得ないか、というところ。

c それらを一般庶民が美しいと見なすか、醜いと感ずるか、というところ。

d それらが資本主義下の欲望の態勢に縛りつけられているか、いないか、というところ。

問三 傍線部3のように筆者が述べる理由は何か。次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

a 資本主義下の欲望の態勢こそが、「誤れる工藝」を世にはびこらせ、逆に「正しき工藝」を滅ぼしつつあるから。
b 審美的な批評の言葉をいくら尽くしたところで、骨董屋と美術商がお金を儲けるだけで、「正しき工藝」は生まれ
ないから。

c 経済学の知識を持たず、資本制度の問題点を論じられない骨董屋や美術商の言葉には、人々の考え方を変えるだけの
力がないから。

d 資本主義下で発達した欲望の態勢を変えない限り、資本主義体制が工藝に与えている罪を明確にできないから。

問四 傍線部4のように筆者が述べる理由は何か。次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

a 柳宗悦は白樺派の文人だったわけではなく、プロレタリア文学運動に傾斜したという事実も残されていないから。

b 柳宗悦は「工藝美」という言葉に強いこだわりを示したが、それはけっしてプロレタリア文学運動とは相いれない概念
であったから。

c 資本主義という制度の勃興とともに、民衆の工藝に見られた美が衰退したことに對して、根底的な批判を柳が持つて
いるから。

d 資本主義社会の発展によって、民藝が墮落してしまい、「正しき工藝」と「誤れる工藝」の差異があいまいになってし
まったから。

問五 傍線部5はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 不可思議な力による恵みによって与えられる「来るべき工芸」が生み出す「美」に無意識のうちに育てられる状況で暮らすこと。
- b 不可思議な力による恵みから生まれた「来るべき工芸」がめつたには気づかれない状況の中で暮らすこと。
- c ありとあらゆる工芸品が、生活の中で庶民の手に馴染み、なによりも使いやすいものになるという状況で暮らすこと。
- d 資本主義下で生まれた欲望の態勢が克服され、「正しき工芸」でも「誤れる工芸」でもない、「来るべき工芸」が到来した状況で暮らすこと。

問六 本文の内容に合致しないものを一つ選べ。

- a 資本主義社会の発展によって民藝は目を覆わんばかりに衰退してしまった。
- b 資本主義が発展した現代という時代に、民藝運動の復興は不可能である。
- c 「正しき工芸」は手になじみ、生活の中で使いやすいものとなる。
- d 機械化の進んだ工場によって商品が大量に出荷されることは、「誤れる工芸」の原因である。